



Title	風来山人『天狗髑髏鑒定縁起』考
Author(s)	福田, 安典
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 1987, 21, p. 1-20
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/47844
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

風来山人『天狗髑髏鑒定縁起』考

福 田 安 典

風来山人、平賀源内の著『天狗髑髏鑒定縁起』（安永五年刊）は、『風来六部集』に収められているものが有名であるが、本来は明和七年に一作品として執筆されたものであり、単行本も現存する。

本作は従来看過されがちであった。小品の故もあるうが、やはりこの作品に於ける源内の手法が判然としなかつた故であろう。そこで本稿では、その手法について一考を試み、本作の価値を考えてみることにする。

一 本草学と平賀源内

源内の本業が本草学にあったことは広く知られている。そこで、本論に入る前に源内の本草学上の動向について略述する。

宝暦六年・四月、源内は離郷し大坂の戸田旭山の門に入る。ついで一ヶ月程で江戸の田村元雄の門に移り、以後その名声を博するようになる。この間の事情については様々な解釈が可能だが、旭山と元雄の学風の違いと考えるのが妥当である。旭山は、稻生若水、松岡恕庵の系統で、文献学的な名物学派であり、一方元雄は、阿倍将翁の系

統のより実地性の強い物産学派である。そこで、より実地性の強い物産学派に移ったのだと、既に指摘されている。その従来の説に、儒学の観点から補足がされるべきであろう。則ち旭山の師の松岡恕庵は、伊藤仁斎にも師事し、仁斎の嗣子東涯や、門人香川修庵、北村篤所とも親交があった。つまり、当初源内はこの古義堂系の、文獻的と称される名物学を指向した。しかし、「野心家で移り気」という従来の評価通り、僅か一ヶ月でより現実性の高い物産学へと、その指向を変更したのである。

扱、湯浅常山の『文会雑誌』に、次の記載がある。

一、子綽云（中略）又徠翁ノ材ハ天縦ナリ。文ノ面白サアマリ卓見ニ過タルヤウ也。天狗ノ説ヲ東涯見ラレテ、サテモノ天狗ノスガタヲアリノマニ書アラハシタリ、妙ナルモノ也。徠翁ナラデカメル文ナルベキヤト、子綽二語ラレント也。

（卷一、下）

一、明和二年巳酉九月十三日、赤穂赤松鴻字国鸞來訪。俗称大川良平。其男名勲、字大業、俗称周蔵ト云々。国鸞云、松岡玄達ガ東涯北村可昌ノ会ノアリタルトキ、徠翁ノ天狗ノ説ヲ人ノ見セタレバ、二人ハ弁駁甚シ、東涯一人黙シテアリケレバ、二人何トテコレヲ論ゼラレザルヤト云ヘバ、東涯人各有三所見、何コトニ批評甚シキヤト云レテ、二人色ヲ変ジ興サメタルトナリ。

（卷三、下）

常山（宝永五ノ安永十）は源内と同時代。常山は自身の見聞を『文会雑誌』として纏めた。前者は、子綽を春台に学んだ大内熊耳と考えるなら、常山の寛延二年もしくは宝暦三年の東下りの際の見聞であり、後者は明和三年の見

聞だと考えられる。つまり、源内が離郷し、本草学に着手し、本作を著す頃、右記の東涯周辺のエピソードが伝播されていた。更に、後世に至っても、例えば『近世叢語』に、

松岡怨庵、北村篤所、在伊藤東涯許、覽物徂徠天狗説、極口刺譏之、而曰、此文非啻聾牙不成語、而説亦可謂不通矣、東涯曰、人各有見、何必輕駁之、况其形容天狗之狀者、宛然如画、今秉筆者恐不及、二子大愧。

と、怨庵、篤所の紹介へと続く高名なエピソードとして載る。又、『先哲叢談』にも載り、先述の『文会雜記』の二ヶ所の記述が、実は一つの連続した事件であったこと、そして長きに亘って広く伝播され得る有名なものであったことが考えられる。但し、篤所は怪しい。篤所は享保二年歿。文中の『天狗説』は荻生徂徠著、享保八年成立。享保十九年刊。篤所が写本にしても『天狗説』を見た可能性は低い。巷間での伝播の内に他の門人と混同されたのであろう。しかし、常山はその東涯等と親交の厚い香川修庵を師事した国鸞からの見聞を記しており、当時は国鸞のような古義堂周辺の人物にさえ、東涯・怨庵・篤所の三者の事件として伝わっていたようである。同様に、源内も当初この古義堂周辺の人々の間に身を置いていた。まして師の旭山は怨庵の弟子である。この事件を聞き及んでいた、と当然考えられるだろう。

『天狗説』は金石文。縦に長い篆刻の法帖である。書道の手本としてよく使われるが、源内以後の考証家にさえ、天狗を論じる際に挙げられる書である。馬琴なども「物子が天狗説、尾張の僧、諦忍が天狗名義考、平賀生が

天狗弁の若き」(『烹雜の記』)と、当作と列挙している。源内が天狗について執筆する際には、当然意識した筈の書である。

この『天狗説』は、徂徠が京の愛太子神社の祀者に頼まれて執筆したものである。文中で「世薦紳先生。或引客星。或援外國之獸者。迺執名惑實。可謂妄已。」と、世の儒者を睥睨し、「知鬼神之情状者、惟聖人為然。」「吾言之信然也。而神實歆之。」と、自身は聖人の智の持主だとばかりに書いている。儒学、特に名物学を真剣に修学する怨庵らが刺譏したのも当然であった。しかし、東涯は二子を穩健に戒しめる。この天狗について執筆される際に、意識されるであろう『天狗説』に端を發する有名なエピソードが、当時巷間で伝播されていた。既に聞き及んでいた源内は、それを作品化したのではなからうか。或いは、その作品化の為に「天狗」についての戯作を執筆したとも考えられる。以下、作品の構成と共に、この問題を考察してみることとする。

二 構成について

それでは、当作品を順を追ってみていく。

初めに戯蝶の序、天狗鬪腰図、大場豊水の序があるが、戯蝶・豊水の序は刊行時に附されたものである。本作の成立後に書かれたものなので、今は問題としない。次いで本文が始まる。まず源内は冒頭に、

明和七ツのとし菊月末の四日。門人來りて薬物の真偽を論ず。(しんぎ ちん)(傍線、筆者、以下同)

と記す。この「薬物の真偽を論ず」る学、これが則ち名物学である。名物学とは、古典漢籍の薬物の真偽を弁じ、正しい名を附す学問である。従って登場人物は名物学の先生と門人と見ることが出来る。そこに大場豊水が一つの異物を携え来る。

昨夜天狗を夢む。今朝夢さめて思ふに、けふは廿四日にて愛宕の縁日なればとて芝の愛宕に詣けるに、門前櫻川と号する小流の中に怪しき物あり。拾上て泥土の穢を洗去れば、しかくくの物なりとて筐を開て取出し、けふ此品を得て歸るさの道にて、見るもの皆天狗の髑髏なりとて市をなせども、固より俗人の億見證とするに足らず、希ば先生真偽を弁ぜよ。

この豊水の言葉が作品の発端である。表面的には作爲のない文に見える。しかし、最後の「真偽を弁ぜよ。」に着眼し、冒頭の「薬物の真偽を論ず。」という状況設定と並置させると、実は名物学的考証を誘致する為の発端であるとみることができよう。俗人が臆測で「天狗の髑髏」だと言うが、名物学の大家の源内に鑿定を依頼し、その様な臆測への批判を期す豊水の意図と見ることが出来る。となると、豊水は実証的な思考の持ち主として描かれるべきであるが、傍線で示したように、豊水がこの異物を入手したのは、天狗の夢と愛宕の縁日との俗信的な符合の故であった。更に門前の川でこの異物を拾った、とその符合は続くのである。恰もこの異物を「天狗の髑髏」だと言わざるを得ない描かれ方ではないか。この俗信的な符合と実証的な名物学が相俟って、この文を奇妙で滑稽なものにしている。作品の発端として充分に考えられた文である。従って源内の創作と見るべきである。その創作のき

かけとなったものは、徂徠の『天狗説』中の、

平安西北。愛太子之山峯焉。頗有榮術太郎祠。主其祀者上人惠通。乞予文。予為天狗説。

だと考えられる。徂徠が『天狗説』を著した動機である。芝の愛宕が京の愛太子より権現を勧請したことは有名であった。源内が発端で、以後筋と関係しない芝の愛宕を案出したのは、徂徠の執筆動機を意識してのことであろう。しかし、この部分のみでは偶然の域を出ない。更に次を見ると、

予諾^カして門人に告て各其志をいはしむ。

と、源内はまず門人の言葉を載せる。一人は「阿蘭陀のぼうごる・すとろいす」又一人は「大魚の頭骨」と、名物の門人らしく見解を語る。が、衆議は一決しない。ここで留意したいのは、門人が二人だということである。先の当時巷間で伝播されていたエピソードも、篤所は怪しいにしても、とにかく門人は二人であった。更に豊水が異物を持参する設定も、門人が『天狗説』を持参する設定と同じだと考えられる。つまり、先のエピソードと本作の人物関係は同じである。

源内はここで自身の言葉を「これ天狗のしゃれかうべなり。」とし、驚く門人達に反論を促す展開を創作する。その誘発された反論に、以下示す様に『天狗説』を用いる。

①夫レ倭俗わやくの天狗と称するものは全く魑魅魍魎ちみもつぢを指すなれども。（『天狗圖體鑒定緣起』以下（縁）と略）
 中国多仙。吾邦多天狗。彼所称（略）而無知安能知人之所命乎。故或以為神為仙。或以為佛為菩薩。為羅漢明王。為魑魅罔兩。（『天狗說』以下（天）と略）

②定まれる形有べふもあらず。（縁）

窃冥之中。盖有物焉。儵忽乎為人。儵忽乎為物。衆莫能端倪。（天）

③然るに今世に天狗を画かくくに、鼻高はなきは（略）又嘴くばの長きは（略）翅はありて。（縁）

世俗所圖傳。廼有象鼻鷓鴣せきこ載勝虎爪電目肉翅鬃けしん乎豊隆之神者。咸称之曰天狗云。（天）

④これ皆画工の思ひ付にて、実に此かくのごとき物にあるにはあらず。（縁）

世薦紳先生。或引客屋。或援外國之獸者。廼執名惑其實。可謂妄已。（天）

⑤聖人も怪力亂神くわつりょんじんを語らずとこそその玉へ。いま是を天狗の圖體しんてい也とは我々あまを欺あざむき玉ふや。（縁）

知鬼人之情状者。惟聖人為然。（天）

勿論『天狗說』をそのまま用いることはしていないが、①の天狗が「魑魅魍魎」を指すのだとする基本的認識は同じであり、更に②から③の連続部分で、その超自然現象を「図」でしか認知できないことが、世人の根本的な誤謬だとする論法も同じである。しかし④では、徂徠は儒者の読者を意識して「薦紳先生」と書き、源内は一般の読者を意識して「画工」と書き、両者の執筆立場の違いが見られる。だが、源内は全く離反したわけではない。門人に

「実に此のごとき物あるにはあらず。」と言わせている。この一文は、名物学の門人の言葉であることから考えて、実は発端で豊水が源内に語ることを望んだ名物学的考証の結論である。これを門人に代弁させたのである。この結論は、徂徠が儒者の迷妄を果断した結論、「執名惑實」を意識したものであろう。徂徠のこの記述自体が、意識的か無意識的か名物学的論理である。従って④も、執筆立場の違いこそあれ、徂徠の記述に触発された名物学的結論と、一応理解できよう。

しかし、それに続く⑤では、全く徂徠に離反しながらも、唐突に『論語』述而篇の「子不語怪力乱神」を引いて、徂徠の文から「聖人」の語のみを採取する。この意図は何であろうか。前述した様に恕庵らが『天狗説』に憤慨したのは、この「聖人」と自称し、儒者を睥睨する徂徠の態度に起因すると考えられる。よって「聖人」の語を省くと、先のエピソードが生きてこない、と源内が考えたからではないか。又、この様に何事も証左に『論語』に溯る学問態度は、何処の学派であろうか。恐らく源内は、伊藤仁斎の古義学を頭に置いていたのであろう。

つまり、源内が造型した門人とは、①から④で名物学的結論と『天狗説』を語り、⑤で「聖人も怪力乱神を語らず」と語ることで、最終的に徂徠に反駁する門人である。更に『論語』を盾に「我々を欺き玉ふや」と大真面目に詰めよる門人は、先のエピソードで東涯に詰めよった古義堂門人の恕庵らを擬したと考えて支障はないであろう。扱、それに対して本来は東涯に擬すべき源内は、何を用いて説得するのだろうか。

④ 古人の曰、薬を賣ものは兩眼、薬を用る者は一眼、薬を服する者は無眼とはとつと昔の譬。(縁)

古人有言曰賣薬者、兩眼用薬者、一眼服薬者、無眼。(『文会録』跋文、以下(文)と略)

⑧ 今時のいしよ醫者といふは(略)薬の事は陳皮もしらず。長屋も露地ろじも踏ふむもすべるもそこらだけが醫者だらけ。薬種屋やくしゆも盲めくら。醫者もめくら。病家は猶盲故。(縁)

至テハ如ニ後世ノ不ニ獨服者ノ無眼ナルノミナラ 而賣ル者ト與ニ用ル者ト亦俱ニ無眼ナリ。(文)

⑨ 翻白菜かほさいとを柴胡さいこと心得。(縁)

誤ニ認テ翻白菜ヲ為ニ柴胡ト。(文)

⑩ 予ニこれヲ憂ヘて藥物の眞偽を正し。(縁)

是レ我 旭山先生所ニ深憂ル(中略) 出ニ藥物數品ヲ辨ヘ其ノ眞偽ヲ。(文)

⑪ 世上の醫者の目を明あんとて。(縁)

志ス斯道ニ者ニ據ニ此書ニ採擇セバ則庶レ免ルニ所謂無眼之憂ヲ哉。(文)

則ち旭山の『文会録』に自ら記した跋文を用いているのである。『文会録』は、旭山が宝暦十年、大坂の浄安寺で開いた薬品会の記録で、源内は小説を手懸ける以前、師の著書に跋を寄せたのである。ここでも先の『天狗説』と同様に、途中までは跋文に従いながら、結論⑩では異なる記述にしている。その転換部は⑪である。「旭山先生」を「予」に変えたのである。つまり自身を旭山に擬したのである。この狙いは何であろうか。

第一に、本作の前年の旭山の死を当て込んだと考えられる。源内はこの二年前にも志道軒の死を当て込んで『瘞陰逸伝』を執筆した。この期の源内の手法と見るべきである。第二に、怨庵への揶揄が考えられる。文中で門人を怨庵、師を東涯でなく旭山に擬する人物造型は、怨庵を揶揄する構造となる。現実では怨庵の方が師なのであ

る。更に怨庵が旭山の弟子、怨庵にとつては孫弟子の源内が書いた跋文によって説得される構造となっている。その構造によつて源内は、名物学派の系譜（怨庵 旭山 源内）を全く破壊し、結局は大先生の怨庵を最下位に配置することで、言語遊戯の面からではなく、人物造型の面からの滑稽味を狙つたと考えられる。

以上の狙いを以て自身を旭山に擬した源内は、目的を果すと自身を虚構化する必要はなくなり、以後、

動と止との文字は合ふても、馬めが合点いたさねば、世話やくがたわけながらも、腹へはいる薬は、人命の存亡にあづかれば、聞ぬまでも赤目引ばり、某時珍になりかはり、一問答せねばならねど呑もせず傳もせず目を飲ばすばかりにて、毒にもならず、薬にも、何のお茶とうにもならざれば、諸人自甘んじて天狗というて嬉しがるならば、其波を揚その醜をすゝりて、天狗にするが卓見なり。

と、自身の主張を繰り広げていく。言い古された表現をすれば、源内の現実への不平の表出と言えよう。しかし、この前までは一つの事件を背景として、虚構化つまり作品化された源内であった。此処で初めて現実の自身を登場させる。この意図は何であろうか。傍線部に留意したい。人の生死に関わるのなら、自身は「時珍」つまり当時の本草学に多大に影響した『本草綱目』の著者、李時珍になりかはるが、毒にも薬にもならないのなら、一般の興味志向に沿う、と記している。ここで「なりかはり」という表現が為されている。作品中の登場人物は「なりかはり」則ち現実の人物に擬することによつて造型した、と自らその趣向を明らかにしているのである。そして、前述の様に自身は旭山に擬したのであった。となると、この作品には源内の本草学上の動向が色濃く反映していると考

えられる。彼は実地性の薄い名物学から実地性の強い物産学へと移った。しかし、この作品は棄擲した筈の名物学の世界で構成されている。又、源内は『菩提樹之辨』（安永七年）でも、

凡夫共めつた無上むじやうに有がたれとも聊いささかも害にならず、若も腹へ入ル菓ならば弁し様も有べけれど天狗てんぐの髑髏しやれかうべ同様に何の絲瓜へちまの可愛かあいそふに、落を取て居らるゝものを我一人知た顔にけちを付るもおとなげなしと、菩提樹びつじゆにして置也。

と、同様に主張している。これは、本作の末尾に附された狂歌に集約される、テーマと呼ぶべきものである。

天狗さへ野夫ではないとしゃれかうべ

極てやるが通りものなり

「野夫（野暮）の標本のような天狗さえ、野暮じゃない洒落者だと、その髑髏を、めききしてやるのが通人といふものだ。」⁽¹⁾という意味だが、とにかく実地性のないものに対しては、学問的であるよりも「通り者」であるうとする源内の意識が読みとれる。この意識は、次の『紀州産物志』の一文にも通じている。

私儀貝品繪畫仕、彼者とも覺へ和名を相正し漢名等一々相考申上度存念御座候得共、是又力不足御座候故打捨

置候。是等は薬用に而無御座候得共、風雅の一助に而御座候。

この『紀州産物志』は、源内が執筆活動を始める寸前の宝暦十二年、藩命を受けて紀州の海岸の貝の調査を纏めた本草書である。文中、薬用にならない貝を「和名相正し漢名等一々相考」える名物学的考証を「風雅の一助」と記す。この「風雅」が具体的に何を指すのか不明だが、本草学以外の余技を指していることは間違いない。そして『天狗髑髏鑿定縁起』『菩提樹之辨』『紀州産物志』を併せ考える時、現実には無益の名物学は、「通り者」「風雅」の領域では逆に生きていることが知れるのである。その意味で、この部分は当作品を余技たらしめる必要条件である。本作が名物学を背景としながらこの部分を存在させることで、源内は本草学者を離れ、戯作者に成り得たのである。そして、この部分を⑩に於て「旭山先生」を「予」に換えることで巧みに誘導してきたことが、源内の手柄であり、又、当作品の価値である。

扱、以上でテーマは終り、後は作品として源内の記す通り「諸人が嬉しがるように落を取る」だけである。先のエピソードを背景とする以上、東涯を登場させなければならない。

⑩ まして天地の廣大なる萬物の際限なき、一人の目を以て極がたければ、答えは繪に画天狗殿がお出やるまいものにもあらず。(中略) 皆尤とうなづきぬ。(縁)

⑪ 盖有物焉。儵忽乎為人。儵忽乎為物。衆莫能端倪。(天)

⑫ 世俗圖傳。(中略) 皆妄也。(天)

東涯見ラレテ、サテモく天狗ノスガタヲアリノマヽニ書アラハシタリ。妙ナルモノ也。(『文会雜記』)
 ①二人色ヲ変ジ興サメタルトナリ。(同)

源内は④では徂徠の説に従う。となると、⑤では「繪に画天狗」は存在しないとすべきだが、「お出やるまいものにもあらず。」と、全く徂徠の逆を書く。ここで落としているわけである。この落ちで先の門人の「これ皆画工の思い付にて、実に此のごとき物あるにあらず。」の質問に返答したのである。普通なら門人は納得する筈がない。だが、ここでは東涯の言葉が裏で利いている。後年の『近世叢語』には「宛然如画」と載せられている言葉である。東涯は徂徠の文章力を誉めたのだが、源内は「そんなに絵に書く如き妙文が作れるのは、やはり絵に書く如きの天狗のモデルが居る故であろう。」と、得意の極論で煙に巻く。源内は最後に自身を東涯に擬したのである。これが、源内が老人として描かれ、従来その意図が不明とされてきた挿画(2)となっていると考えられる。従って怨庵らに擬せられた門人二人は、唯⑥の如く納得せざるを得ない。そして作品は完結する。

以上の様に、本作は名物学派のエピソードを背景として、現実の人物に「なりかはる」登場人物の造型と、『天狗説』『文会録』跋文を巧みに織り込み構成しているのである。

三 跋について

当作品の跋を読むと、先程の『文会録』跋文を用いたもう一つの狙いがわかる。まず、

天狗鬮體鑒定縁起といへるは、一とせ予が戯に書ちらし、大場豊水に與へたるを、

と冒頭に記し、本作が虚構であることを示唆している。次いで、

此頃書林開板しけるを、或人見て予に謂て曰、嗚乎子か人を譏る事甚しひかな。彼文中鑿者と藥店共に盲とし、陳皮もしらすとは何事をや。(略) 此書行れざる以前、此文を削去て世の嘲を免るへしと。

と、『文会録』跋文を用いた部分に対しての、某人の批判を載せる。これに対して、源内の反論が次に続く。これが『文会録』跋文を用いた狙いであろう。

陳皮青皮のわかちあり。然るを香川氏か薬選に讒言をついてより、古方家と稱する文盲醫者とも、陳皮を捨て青皮而已をつかふ。(略) 蜜柑の皮より腹の皮、日頃笑止千万と思ふ息が鼻へぬけ、戯まじりに書ちらせしなり。

文中の「香川氏」とは、古方家で仁齋をも師事し、儒医一本論を提唱した香川修庵である。つまり、「日頃笑止千万」と思っていた古方家、その代表の修庵を批判する為「戯まじり」に執筆したのだと断言している。源内は、

香川氏葉撰ニ、人参苦味ヲ以テ本性トシ（略）皆癡論孩説一知半解、固ヨリ擧テ論ズルニ足ズ。

（『物類品隲』宝曆十三年）

醫者は古方家後世家と陰弁慶の議論はすれども、治する病も療し得ず、流行風の皆殺し。

（『放屁論』安永三年）

兎角是は古方家へ下させずは、此肝積はなほるまいと。

（『放屁論後編』安永六年）

と、小説を手懸ける前から、終始古方家を批判していた。又、『近世畸人伝』の巻五の旭山の項に「香川太仲秀庵が薬選を難じて、非薬選を著し印行す。」とあるように、旭山が修庵の『一本堂薬選』を難じて『非薬選』を元文三年に著したことは有名であり、「香川氏が葉撰に讒言をついてより」と修庵を批判する為には、旭山の著書『文会録』は格好の書であったのである。更に落ちで門人を諭す「天地の廣大なる萬物の際限なき、一人の目を以て極がたければ、答は繪に画天狗殿がお出やるまいものにもあらず。」の言葉は、『非薬選』の中の修庵批判「天地之間怪異不可得而測焉以己之未識見謂無有也則猶夏蟲笑カ冬氷ヲ耳。」に拠ると思われる。源内は門人の一人を修庵に擬し、旭山の批判を東涯に委託して、古方家を当作品に於て一蹴したのである。

四 恕庵揶揄の意図

さて以上の様に本作を読解するならば、前述の恕庵揶揄にも、本草学の何らかの背景があるのではないか、と考えられる。

源内の本草学書『物類品隲』（宝曆十三年）に、次の記述がある。

△龍骨（略）讚岐小豆嶋産上品、海中ニアリ。漁人網中ニ得タリト云。其ノ骨甚大ニシテ形體略具ル。舐之着レ舌ニ用レ之ヲ其ノ驗本草ノ主治ト合ス。是レ眞物疑ベキナシ。近世漢渡龍骨アリ。是レ一種ノ石ニシテ眞物ニアラズ。木化石ニ近シ。倪朱謨ガ本草彙言ニ所説ノモノ是ナリ。朱謨眞物ヲ見ズ。世俗ノ言ヲ信ジテ晋蜀山谷所産ノ一種ノ石ヲ認テ龍骨トシ妄ニ辨ヲ費ス。松岡先生是ニ雷同シテ眞ナルモノ絶テ稀ナリト云ヨリ吠聲ノ徒管見ヲ以テ辨説ヲナス。皆夏蟲不知レ氷ノ論擧テ論ズルニ足ズ。（卷之四）

文中の松岡先生が松岡恕庵である。愚妄な世人の代表として恕庵が挙げられている。この傍線部が当作品と関係しないだろうか。則ち、天狗の髑髏も川の中で見つかり、源内が得たのではなく豊水が得た。そして絵に書く特徴を備えていた。世俗は臆測で天狗の髑髏だと言う、とその類似点は多く、「吠聲ノ徒」という批判も、跋の「古方家と称する文盲醫者ども」に通じているのではないだろうか。更に直接批判の対象となった恕庵著、『用藥須知』（享保十一年）の龍骨の項には、

眞ナル者絶テ稀ナリ故ニ一種ノ白石ヲ以テ代レ之ニ今漢ヨリ渡ストコロノ者是ナリ。李肇テシカ國史補ニ不知ラシテ大魚ノ骨トス誤レリ。倪朱謨ガ本草彙言ニ詳ナリ。

（卷四）

とあり、これが「蛮夷の大鳥たりとも斯まで大には有べからず。この大魚の骨ならん。」と、文中の門人の言葉に

採られているのである。

ここで怨庵が批判されるのは、実地経験に依らず、中国の文献をそのまま鵜呑みにして誤認を犯す文献学的な態度の故であり、それは先の引用で旭山が修庵を批判したのと同じく、「夏虫氷を知らず」と批判されても仕方のない名物学の欠点だったのである。

又、木内石亭の『龍骨之辨』に、

明和年中東武佃嶋ノ漁父沖ニテ網ニ得タリト龍骨一ツ漬帰ル（中略）平賀氏購得タリ源内常ニ竜骨ト云物ハ象骨ナリト云シガ是ヲ得テ後象骨ノ説曾テ不云龍骨ノ辨ト云書ヲ著述シテ是ヨリハ竜骨真竜ノ骨ナリト説ケリ。

とあり、杉田玄白の『蘭学事始』には、次のカランスと源内の龍骨問答を載せる。

カランス曰く、その国にて伝ふるところは、この物大蛇頭中より出づる石なりといへり。源内聞きて、それは左様にあるまじ。これは竜骨にて作りし物なるべしといふ。カランス聞きていふ、天地の間に竜といふものはなき物なり、如何にして、その骨にて作るべしやといへり。こゝに於て、源内己が故郷おのなる怨州小豆島より出せる大なる竜歯につゞきたる竜骨を出し示して、これ即ち竜骨なり。本草綱目といへる漢土の書に、蛇は皮を換へ、竜は骨を換ふと説けり。今われ示すところのスランガステーンはこの竜骨にて作れる物なりといへり。

カランス聞きて大いに驚き、益々その奇才に感じたり。これによりて本草綱目を求め、右の竜骨を源内より貰ひ得て帰れり。その返礼としてヨンストンス禽獸譜、ドドニューイス生植本草、アンボイス貝譜などいへる物産家に益ある書物どもを贈りたり。

この問答は明和六年と見られている。⁽³⁾つまり、石亭が記す様に、恐らく明和六年以前に源内は龍骨を入手し、以前の所有の物と併せて、龍骨が真龍の骨だと確信したのであろう。そして、明和六年、つまり本作の前年、紅毛人のカランスを驚嘆させ、珍重な物産書を手にした。まさしく「天狗になる」状況であった。そこで、自身のこの功を誇示する為に作品に当て込んだのであろう。カランスの「天地の間に竜といふものはなき物なり。」との発問に、胸を張って龍骨を出し示した源内は、作品中でも「繪に画天狗殿がお出やるまいものにもあらず。」と記す。それは矜持と共に、名物学に対する挑戦でもあった。カランスとの問答で自信を得た彼は、宝暦期に萌芽した、名物学、特に怨庵の実地経験の欠如への批判を更に強めたのであろう。従って、怨庵擬する門人は「尤も」と頷く外はなかつたのである。

つまり、怨庵揶揄には、自身の経験によって強化された名物学批判と、自身の龍骨における功の誇示の二つの意図があつたのである。

五 結 び

以上を整理してみると、この短編には多くの要素が混在している。典拠として、東涯周辺の事件、『天狗説』、

『文会録』跋文。批判の対象が、忍庵に代表される名物学と、修庵に代表される古方家。当て込みが、前年の旭山の死と、自身のカランズとの龍骨問答。更に塩村耕氏の御教示によれば、⁽⁴⁾当時江戸の茶屋で天狗の鬪體の見せ物があった。そういった見せ物をも当て込んだ可能性もあろう。これらの要素をその孰れにも偏らず、滑稽な一作品として構成し、その現実の人間に対応する登場人物を造型することが、源内の小説の手法であると考えられる。

当作品は、源内が物産学へ移行した際、棄擲した名物学の世界を戯作化した手本とも言える小説である。則ち、先のエピソードを骨子とする故、源内と門人二人の登場人物が決定され、その事件が『天狗説』に端を発している以上、天狗が出てくるのも当然である。自身の龍骨の発見を当て込む故「鬪體」となり、名物学を揶揄する為「鑒定」の概念が生じる。そして『天狗説』が愛太子神社に送られた事情と、龍骨の入手の由来とを掛けあわせて「縁起」としたのであろう。つまり『天狗鬪體鑒定縁起』は成るべくして成った題名だったのである。

しかし、本作が以上の要素のみで構成されているのなら、源内の全作品中の一趣向を示すに留まる。これが前述の余技観、小説観と結びついている点に意義があろう。非実用性が「通り者」の基準であることを如実に示した作品である。その意味で、源内の戯作の概念が、雅俗の対立からではなく、虚学と実学の対立から生じるのではないか、といった問題を呈示していることが、当作品の意義であると思う。

注

(1) 『風来山人集』(岩波古典文学大系) 中村幸彦氏頭注。

(2) 同書で、中村幸彦氏も「源内を甚だ老人に描いたのは、安永七年、五十一歳で、五十歳の坂を越した意でもあろうか。」

と、疑問を呈しておられる。

(3) 『蘭学事始』(岩波文庫) 緒方富雄氏註。但し、氏はこの問答を宝曆十一年。相手はバウルとされている。しかし、やはり明和六年と見るべきである。

(4) 氏の御所蔵の刷り物は、無刊記ながらこの作品の口絵と類似した天狗の鬮の図が載る。氏の御教示によれば、明和頃のもの。しかし、当作品との前後関係は断定できず、可能性のみにとどめておく。

(大学院前期課程学生)